
戦女神の血脈—アストライア戦記—

皇 十夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦女神の血脈―アストライア戦記―

【Nコード】

N7142B

【作者名】

皇 十夜

【あらすじ】

古くから続く商家の娘として育った少女・綾乃^{あやの}。なんとなしに、『このまま平凡に日常を過ごしていける』と思っていた矢先、それは覆されてしまった！？養父に連れられて出席したパーティで購入した黒狼の毛皮が実父と判明してしまい、綾乃は自らの正体を知っていく。苦難を越えて、綾乃はその先に辿り着けるのだろうか。

始動！

『綾乃、好きなものを選んでいいんだよ』
物語の始まりは、こんな些細なこと。

なぜこれが『些細なこと』なのかというと、綾乃は古くから続く商家の娘で、世間的にいうといわゆる『お嬢さま』という種類の人種だったからだ。

ムダに広い庭と敷地には、これでもかというくらいに豪華な屋敷も聳^{そび}えている。

物心ついたときから、彼女には裕福が当たり前。
だから『いつも』のように父親に連れられて、得意先の毛皮商に品定めに行ったのだった。

郊外（郊外といっても、中心部までが離れているだけ）の自宅から専属秘書の運転で、中心部を経由して目的地まで向かう。

「どうなさいました、顔色がよろしくありませんが」

「なんでもないわ。……ちょっと虚しいだけ」

淡い桃色のカクテルドレスに身を包んだ少女・綾乃はつい、と整った顔を逸らす。

ルームミラーに、秘書の華奢な赤縁眼鏡が映っている。

眼鏡の奥の、軽薄そうな一重眼がスツと細められた。

綾乃は、彼女の運転で外出するときに味わう無音——いや、そうではない。実際のところ、彼女のことが大嫌いだった。

「なにを仰いますやら……お館様が引き取ってくださいってから、夢のようによくしていただいているではありませんか。『たかが』養女なのに光栄なくらいです」

（また、『たかが養女』って……）

確かに自分は養女だ。だが、養い親は自分を実子と同じように大切

にしてくれている。

実際、そこに問題はありはしないのに。

年嵩の彼女は、厭味^{いやみ}を言っ^てて自分がどういつ反応を返すのか楽しんでいるのである。

だが綾乃は、特に抵抗したりはしない。

目的地で養父^{ちち}とは合流する約束になっているし、それまでを辛抱すればいいのだから。

（この人、嫌い……早く着かないかな）

綾乃が物思いにふけっている間に、あつという間に目的地に着いていた。

まだ妄^{ぼう}つとしている綾乃の背後でバン！と秘書の車のドアが閉まる。瞬間パチン、と彼女の虚ろだった瞳に色が戻った。

綾乃が振り向くと、彼女は主人と合流を済ませ、深々と礼をとって屋敷へと戻っていくところだった。

綾乃は小さく、本当に小さくだが安堵の息を吐いた。

「綾乃、どうした……顔色があまりよくないぞ」

「うっん、大丈夫よお父様……早く行きましょ？ 私、とても楽しみだったの」

笑みを深くする綾乃。

だが自分でも内心、嫌気がさしていた。いつの間に、自分は作り笑いがこんなに上手くなっただらう……と。

店内には、様々な毛皮があふれていた。

キツネにテン、鹿などが所狭しと並んでいる。

それはもう、目移りする……では済まないくらいに。

綾乃は、手近にあったラビットファーを取って首に巻いた。

「お嬢さま、よくお似合いです……こちらのお色もございますよ」

店員が、淡い栗色のファーを持ってくるが、養父の指示がそれを遮ってしまふ。

「ああ、それもいいが…君、あそこに飾っているフォックスを持ってきてくれ」

「^{かしこ}畏まりました」

店員が行ってしまつと、養父は綾乃の首に巻いてあるファーをやりわりと抜き取る。

「なんだ、ウサギなら他にもたくさん持っているだろう？　ほら、これなどお前によく似合う」

養父は、銀狐の襟巻きを首に巻いてにつこりと微笑んだ。

「そうね…」

確かにその通りなので、反撃の余地がない。

なによりこれといったものも見当たらなかったし、新作が入ったからと招待されたので来たまでにすぎなかったのだ。

父の方を振り向くと店主と話し込んでいて、当分とぎれそうもない。

綾乃は、仕方なしに店内をうろつくことにした。

鹿皮は見かけはともかく、ごわごわしていてどうにも感触が悪い。

熊の毛皮まであったが、掃除用の束子^{たわし}のようなのでとりあえずは遠慮しておく。

ラビットもフォックスも、その他諸々のものを自分は持っているのだ（流石に鹿や熊は持っていないが）。

けれど一つだけ。

一つだけ、目を引くものを綾乃は見つけた。

闇に溶け込むような漆黒。

black wolf .

黒狼の毛皮だった。

店の片隅にまるで隠すように置いてあったそれは、どこか孤独なオーラを醸していた。

（あ……れ？）

気がつけば購入して……。

決して、買う意志が働いたわけではないのに。

ただ、声を聴いた。

重く、搾り出すようなこえ聲を。

【見つけた……我が同胞よ】

彼方から響く声が、直接頭の中に響いて渦を巻く。

【……お前の未来は混沌だ。……人としては生きられぬよ】

衝撃の次に来たのは、鼓膜に穴が空きそうな静寂だった。

目の前に養父がいて、店主がいて。心配そうな素振りを見せている。しかし、その凡てが形を結ばない。

あるのは、声のない映像だけだ。

【目を開けて、よく見てみるがいい。ここが、お前の在るべき世界か否か……決めるのは、お前】

悪魔のような静謐せいひつが急激に途切れると、音の渦が一気に押し寄せた。

「綾乃、しっかりしなさい……ああ、ひどい顔色だ」

背を支えられて、改めて自分の状態を理解する。

養父と店主曰く、自分は黒狼の毛皮を着たまま、店の隅で倒れていたそうだ。

ちなみに、毛皮を着た記憶などない。

目を惹かれただけで、触れずにいた筈なのである。

どう考えても、矛盾が残る。

異界へ！（前書き）

『人間』として、ごく普通に過ごして来た綾乃。

実父の毛皮（＋精神体）と思いがけず邂逅してしまった事によって彼女の運命は流転を始めた！

異界へ！

帰宅した綾乃は、おそらくは伝令で事情を聞いたのだろう、騒ぎ立てるメイド達を潜り抜けて購入した毛皮を抱えて自室に避難した。白木の木目ドアが、後ろ手で音もなく閉められる。

世話だの何だのと騒ぎ立てるメイド達。

まあそれが仕事なので仕方ないとは思っているのだが、本心をつてしまえばこれ程疲労を覚えるものはない。

別に世話を焼かれずとも、基本的なこととはできる。疲れているときは放って置いて欲しいのが綾乃の本心だった。

だが、そんなことはいえるはずもない。

綾乃は、胸一杯に溜まった悪態を溜息と一緒に吐き出したのだった。

（ああもう、やめろ……余計に疲れるでしょうが！）

「これだからメイドって苦手……秘書だかメイドだか、もうんざり」

【――鏡をごらん、お前の姿が映っているぞ】

直接頭の中に響く声は不思議と恐ろしくはなく、寧ろ訴えかけるような響きを持っている。

甘く響く声は綾乃を大きく揺さぶり、蜜のように絡みつく。

「貴男、貴男は誰なの……？」

彼方からの声に、綾乃は震える声で小さく問いかけた。

【やっと見つけた。こんな場所にいたのか――……我が娘よ……】
「ええ！？」

綾乃はその身を凍らせる。

自分が養女だとは知っていたが、これは一体どうしたことだろう。

【毛皮を、鏡に映してみなさい】

困惑し、強張っている綾乃の様子を察したのか、柔らかな声が促した。

「これを、映せばいいのね……？」

綾乃はおずおずと、窓際に据えた姿見に毛皮のコートを映してみる。

【そうだ。見なさい……これがお前の本当の父の姿だ】

暗い部屋の中、月明かりに照らされた姿見がぼんやりと光を帯びていく。

夢のように美しい光景だが、綾乃にはまだ、この現実が俄に信じることができなかった。

「貴男が……お父様？」

鏡の中には、漆黒の髪をした青年が映っている。

滑らかな漆黒の髪に、そして青い——アイスブルーの瞳。

【情けないことに、お前を捜しているうちにこんな姿になってしまった】

「つまり、殺された……と」

【そのようだな。だが肉体を棄てた分、いくらか自由なのだ】
と、鏡の中の若い実父は楽しげに語る。

【それにしても、人間の中で育った割に驚かんな。流石は俺の娘だ】

「なに喜んでるのよ。殺されちゃったんでしょ？ それってやつぱ

り……幽霊なのよね？」

【まあ、そういう部類にはなるがな。大したことじゃあない】

「もう……」

（十分大したことだってば！ でも、確か幽霊って鏡に映んないんじゃないかってかしら）

「……お父様、鏡に姿を映せるなら、実際に形を取ることも可能なんじゃないの？」

しばしの空白の後、考え至った綾乃はそっと鏡面に触れて呟く。

（す、すごい美形……なんて素敵なのかしら）

「それに……とっても素敵」

恋愛経験の全くない綾乃にとって、それは些か刺激が強すぎたようだった。

なのでぼそぼそと呟いた綾乃の頬は、トマトのように真っ赤になっ

ていた。

【ん、なんか言った？　そうか、その手があったな】
いま知ったように言う彼に、綾乃は小さく肩をすくめる。

【では早速】

鏡面が水盤に張られた水のように揺らぎ始めると、ぬらりと地黒な片腕が突き出される。

次に双肩の出現と共に、頭もが露わになった。
そして凡てが抜け出した後、姿見は音もなく光を撒いて崩れ去ったのだった。

【ま、実体が在ろうとなかろうと……不自由することはない。現にこうして触れたりもできるし】

暖かい大きな手が、綾乃の頭に触れる。

実体がないのに、どうして温もりを感じるのが不思議だ。

【今まで、済まなかったな。『あの時』はこうするほか方法がなかったんだ】

（あの時？……ってなんだろう）

「一つ、聞いてもいい？」

【何だ？　一つといわず、いくらでも聞いていいぞ？】

綾乃に会えたのが余程嬉しいのか、彼の尻尾がフル回転している。

……ように見えるのは、気のせいだろうか？

綾乃は居住まいを正すと、目の前の実父にそつと問うた。

「その、耳と尻尾はなに？　どこの民族？」

どこか異国の民族で、そういった扮装をする一族がいるのを聞いたことがある。

きつと、その衣装に違いない。

（でも……どうなってるの、これ。全然作り物とかじゃなくて…違和感がない！）

そう思ったのも束の間、彼はにこやかに綾乃の希望を叩き割った。

【何かと思えば、自前に決まってるだろう？　それに、造作はお前

も同じなんだからな。ほら、窓にも映ってるだろ】

「へー!?」

昏く沈んだ外景に、窓ガラスが鏡のように二人の姿を映しだしている。

緩くパーマのかかったロングヘアから、それと同色の毛玉——いや、耳が覗いている。

あまつさえ、それは触れるとぴくんと揺れてしっかりした反応を返し、神経の通った本物であることを綾乃に思い知らせた。

(耳っ…耳動いたッ)

綾乃は眩暈を隠しきれず、些か過剰なくらいにきりきり舞をした。

「やだ…やだやだ、あたしって人間じゃないのー!?!」

【正確には人狼だな、人間じゃあない】

「人狼って、狼男のこと?」

人狼と聞いて、咄嗟に思いつくのはそれしか見あたらない。

何ともお粗末な知識だが、綾乃は怖々と聞いてみた。

【フン。昔の人間の偏見の一つだな……人狼は男女ともいるぞ】

「ということは、あたしの本当のお母さんがいるってことになるかい?」

【勿論だ、泣く泣く手放したんだから……会えば必ず喜ぶだろうな】
まじめ顔でうなずいた若い父に、綾乃は無意識に一步步つ後じさっていた。

先刻の言葉を思い出したのである。

《——人としては生きられない。そして、人界は在るべき場所ではない》と。

「あたしに、どうしろと?」

【そうだなあ、このままではお前の存在自体が歪んでしまう。元々暮らすべき場所に連れ帰るしかあるまい。——来なさい】

ぐい、と腕を牽かれる。

嚴重に鍵をかけたはずのドアが、錠を解きもせずに容易く開いた。それだけではない。

通り過ぎる空間には音はなく、
いくらか色褪せて見える。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7142b/>

戦女神の血脈—アストライア戦記—

2010年10月10日20時31分発行